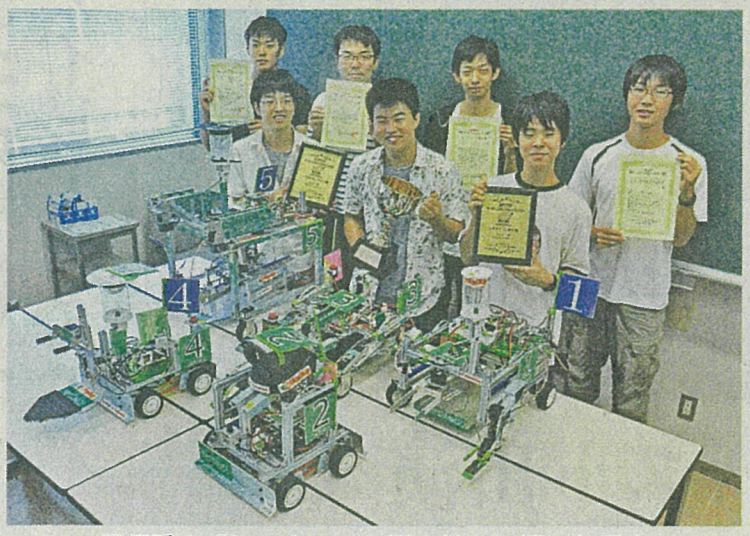
山陽新聞 2016年8月25日(木) 28面（全県版）

全国レスキューロボコンテスト

# 県立大 初の工学大賞

## 10年目で栄誉 「技術向上に役立てば」

全国の工学系の大学生らが災害現場で救助活動を行うロボットのアイデアや性能を競う「レスキューロボットコンテスト」（6、7日・神戸市）で、県立大（総社市窪木）のロボット研究サークルが最優秀に当たる「レスキュー工学大賞」を受賞した。初挑戦から10年目で初めてつかんだ栄誉。学生たちは「救助技術の向上に自分たちの発想が役立てば」と夢を描いている。（民直弘）



最優秀の「レスキュー工学大賞」に輝いた県立大サークルの学生たち

コンテストは、地震で建物が倒壊した6分の1サイズの市街地が舞台。高さ60㌢、幅70㌢未満のロボットを、搭載カメラの映像を頼りに遠隔操作し〝被災者〟の人形を一定時間内に、いかに迅速かつ優しく救出できるかを競う。今年は6、7月の予選に24チームが出場。神戸市での本選には14チームが進んだ。

県立大は、不安定な被災建物が揺れないよう、アームを使って固定するロボットなど独自に開発した5台を投入。うちブルドーザー型の1台には高解像度カメラを取り付け、倒壊状況や被災者の状態を、遠隔操縦者が望む角度から撮影する役割を担わせて作業の効率化を図り、高得点につなげた。

「高校時代の恩師から、技術は人を助けるためにあると教わった。その言葉を形にできたと思う」と情報工学部2年小林倫貴さん(19)。

コンテストは阪神大震災（1995年）を教訓に2000年から毎年開かれ、県立大のサークルは07年から挑んできた。今回は工学大賞のほか、高得点のチームに贈られるベストパフォーマンス賞など4賞も受賞した。

ロボットを製作中の4月には熊本地震が発生。被害が出た大分県出身の同3年三股亮斗さん(20)は「コンテストで知恵を絞った技術が、将来、災害現場で実際に役立つロボットの開発につながるとうれしい」と話している。

山陽新聞社提供